

令和6（2024）年度学校評価（自己評価）					
一人一人の良さを伸ばす教育により、児童生徒の自信を育み、主体的に社会参加できる人間を育成する。					
【評価基準　5：十分達成されている　4：おおむね達成されている　3：半分以上は達成されている　2：努力が必要である　1：成果がみられない　】					
重点目標	評価項目	分掌部	評価の観点	評価	達成状況等
1	自信と意欲を育む指導の推進	小学部	・進路を見据え、今身に付けてほしいことを吟味し、日々の学習に落とし込んで実践する。	4	・あらゆる指導場面において、卒業後の生活に必要な人との関わり方の基礎になる力を育てた。日常生活の中で、自分でできる部分と支援を依頼する部分を児童と一緒に確認しながら指導にあたった。次年度以降も継続していく。
		中学部	・生徒の実態を適切に把握し、将来を見据えて達成感や成就感が得られる指導内容を設定し、指導にあたる。	4	・生徒の自主性を尊重しながら、長所を伸ばし自信を高めることができるように指導にあたった。また、職場・施設見学、作業的な学習、立志に向けての学習などを通して、卒業後に必要となる力を見据えながら指導にあたることができた。今後も生徒が達成感や成就感を得られるような指導内容を継続していく。
		高等部	・生徒一人一人の発達段階に応じた学習面・生活面の手だてを共有し、卒業後の生活を見据えた指導にあたる。	4	・指導方針や手立てについての認識を共有しながら日々の学習を実施することで、生徒の自発的な表出を増やすことができた。また、産業現場等における実習等の経験から卒業後の目標が明確になり、指導に生かすことができた。卒後を見据えた指導を継続していく。
		ICT活用推進部	・機材管理やアカウント管理などのICT環境の基盤整備を確実に行うとともに、児童生徒が学習場面や生活場面でICTを活用できるよう、研修会やOJTを通して教員を支援する。	4	・一人一台端末に表示される入口サイトに掲載された学習アプリなどを児童生徒が活用することができた。また、発声の困難な児童生徒がエクセルなどの音声合成機能を利用して司会や発表をすることができた。来年度も引き続き児童生徒がICTを活用できるよう教員を支援していく。
		学習指導部	・育成を目指す資質・能力の視点にたち、児童生徒の強みや興味関心を生かした学習指導を意識することで、学びの意欲を高めたり日常生活における活力につなげたりできるようにする。	4	・教科担当者会において、学部間の系統性を確認したり授業実践について共有することができた。Teamsを活用し、当該の学習について発信をすることができた。一方で、実践につなげるまで至らないこともあったため、周知の仕方や研修等を工夫していく。
		特別活動部	・挨拶運動や校内放送、各行事の中で、人前で話す機会を多く設け、児童生徒が自信を持って取り組み、やりがいや達成感を感じられるようにする。	4	・挨拶運動では、児童生徒会役員を中心に児童生徒が率先して行い、学校全体で元気の良い挨拶を聞くことができた。その他の児童生徒会行事では、全校児童生徒の前に立つことや校内放送を通して、一人一人が自信を持ち、堂々と話をする姿が見られた。 ・次年度は、児童生徒会役員だけでなく、全校児童生徒が活躍できる場面を多く設定する。
		自立活動指導部	・自立活動実習教員の専門性や得意分野をまとめ、学習会で実践を交えて紹介したり、学部会やTeams等で周知したりすることで、教職員の専門性をより高め、自立活動の時間だけでなく学校生活全般において指導にあたれるようにする。	4	・年間5回実施した学習会では、自立活動実習助手の専門性に特化した研修内容を行うことができた。放課後1時間での実施のため、伝えきれないところもあったので、次年度以降は、長期休業中に学習会や研修会を設定し、教職員の専門性をより高められるようにしていく。
		児童生徒指導部	・生活アンケートや日々の生活の様子から生徒理解を深め、指導や学習の内容については、ケース会議を実施するなど組織的なチーム支援を行う。	4	・生活アンケートやいじめ等に関する調査を年に3回実施し、定期的に生徒理解を深める機会を設けた。ケースによっては会議を実施し、寄宿舎教員や自立活動実習助手を含めた関係職員での組織的な支援に努めた。次年度に向けてアンケート内容や集計補法を検討する。
2	安全安心の確保に向けた危機管理の徹底	寮務部	・集団生活を通して、より良い人間関係を築き、ルールやマナーを守る態度を育てるとともに互いに喜びあえる、助けあえる、認めあえるやさしい気持ちを育てる。	4	・寮祭、年末お楽しみ会、舎室活動、マイチャレンジなどの寄宿の行事や活動を通して、みんなが同じ目標に向かい、団結しあい協力しあい助け合いながら自信と意欲を育むことができた。「楽しむ」ことが意欲を掻き立て、生きる力を身に着けることができた。 ・普段から舎生ファーストの観点に立って関わっていく。舎生の意見、希望を積極的に聞き、舎生主導の舎生会を目指す。
		小学部	・各訓練を積み重ねる中で、特段の配慮や高度な医療的ケアを必要とする児童の避難について課題を洗い出し、体制の整備につなげる。	4	・ブロックの教員間、あるいは教員と学校看護師間で話し合って課題の洗い出しを行い、必要に応じて健康指導部や教務部とも共有し、体制の整備に近付くことができた。
		中学部	・日々の学習活動や校外での活動における安全対策や緊急時の対応について再確認し、職員間で共通理解を図り対応できるようにする。	4	・情報共有や緊急時の対応訓練を適宜行ったことで、発作時など、生徒の体調が急変したときに、連携・協力して対応することができた。また、医療的ケア対象の生徒の緊急時対応について、学部全体で共通理解することができた。次年度以降も継続していく。
		高等部	・生徒の配慮事項や緊急時の対応について共通理解を図り、緊急事態が起こったときに周囲の教員と連携しながら迅速に対応できるようにする。また、予見できるリスクを検討し、事前に予防・対策を徹底する。	4	・校内での発作時の対応、校外での緊急時対応、ハリーコール訓練、避難訓練等において、日々の危機について具体的に検討し、情報を共有して対応することができた。また、医療的ケアの対応についても保護者や教員間で十分に連携を図り、事前の予防・対策に努めることができた。今後も更に情報共有に努める。
		教務部	・昨年度洗い出された課題に対応した避難訓練を計画・実施し、反省を改善につなげる。	5	・昨年度からの課題であった医療プースの運用について、避難訓練の計画段階から関係する係と連携して検討し、訓練後には更なる改善点を見出して次回の計画に生かすことができた。反省を改善に生かすというサイクルが根付いてきたことが感じられた。今年度の反省から、本校における基本的な避難行動の更なる定着のため、「のざわ防災月間(9月)」を有効活用する。
2		特別活動部	・障害者スポーツ大会に向けて、スポーツ事故防止ハンドブックを参考にし活動中の怪我や事故防止に努める。練習の際には事前に天気予報を確認し、雷の発生や熱中症の予防に務め、災害事故を未然に防ぐようにする。	4	・関係職員へのteamsと回覧にて危機管理マニュアルとスポーツ事故防止ハンドブックを練習開始前に共有することができた。次年度はより早い段階で共有できると良い。また、天候の事前確認や熱中症指数計の活用によって、災害事故の未然防止に努めることができた。

安全安心の確保に向けた危機管理の徹底	②前年度の反省と危機管理マニュアルを踏まえた危機管理の徹底	児童生徒指導部	・スクールバスの乗車中、車椅子の設置についての注意事項や緊急時の対応について共通理解を図り、スクールバスの安全かつ円滑な運行を確保する。	4	・教職員を対象とした研修を計3回（校内での車椅子設置研修、スクールバス内での設置研修、登下校のSBに実際に乗車しての研修）行った。ほとんどの職員が参加し、スクールバス乗車に向けての必要な知識・技術を身に付け、安全な運行につなげることができた。今後は、スクールバスの説明会等で取り組みを発信していくとともに、安全に運行していることが分かる記事や写真をHPに掲載する。
		健康指導部	・学校看護師、栄養教諭、その他関係する教職員と協力して、のざわ独自の「学校における胃ろうからのペースト食注入に関するガイドライン」を完成させ、そのガイドラインに沿って、保護者、主治医と連携を図りながら、安全なペースト食注入の体制を整え、実施していく。	4	・指導医や学校医とも連携しながら、ガイドラインを完成させ、関係職員に「学校における胃ろうからのペースト食注入」の流れを周知した上で、関係児童生徒の保護者に内容を知り希望を確認することができた。現在2名希望が出ており、家庭での継続した注入や主治医の指示・確認を依頼し、実施に向け進めている。今後、新転入学生への周知と随時関係児童生徒への声掛けを行っていく。
		寮務部	・夜間対応訓練、避難訓練、防犯訓練を通して、安全に避難するためにマニュアルを共有し、迅速的確な対応がとれるよう寄宿舎生と教職員の危機管理能力を向上させる。地域の消防団、消防署との連携を図る。	4	・訓練のための訓練にならないように、本番を想定し実施することができた。ひとつひとつの訓練を見直し、反省し、いざという時のために、舎生の安全安心のためにどうすればいいかを考え、反省を洗い出し、反省を共有し、よりよい手段、方法、対応を見直した。結果、マニュアルをわかりやすいようにシンプルに作り直したり、職員の危機管理の意識を改善したりすることができた。 ・「安全安心にゴールはない」訓練の反省や作り直したマニュアルをもとに来年度取り組んでみて、より安全安心な寄宿舎になるよう積極的に改善点や変更点を検討し、舎生がより安心して生活できる寄宿舎を目指す。
		小学部	・家庭とは従来取り組んできた連携を丁寧に継続していく。また地域に対しては、豊郷南小との交流活動の再開や地域のボランティアの積極的な活用などを通して、本校小学部の現状について直接知ってもらう。	4	・連絡帳や懇談などを通して家庭と密に連携することができた。豊郷南小との交流や、ボランティアさんに授業支援に入ってもらったことで児童の様子について直接知ってもらうことができ、HPや地域の回覧板などで発信した。次年度は地域に根ざした学習活動を、さらに積極的に発信していきたい。
3信頼される開かれた学校作りの推進	③家庭・地域との連携強化と積極的な情報発信	中学部	・進路についての情報交換会や研修などを実施し、職員一人一人がキャリア教育についての理解を深める。生徒への進路指導に役立てるとともに、保護者に対して日頃から中学部段階で必要な進路情報を発信できるようにしていく。	4	・職員進路研修や情報交換会を通して、進路についての知見を深めることができ、生徒や保護者に対して、具体的に進路の情報を発信したり聞き取ったりすることができた。結果、進路指導部の行事に参加する保護者が昨年度より若干増えた。来年度以降は、保護者会や個人懇談でも進路指導部の行事の案内を行っていく。
		高等部	・地域の資源を生かした職場体験・就業体験学習等の体験活動や交流及び共同学習の充実を図り、活動の様子をHPやおたより等で家庭や地域に情報発信していく。	4	・就業体験や職場体験は、地域の「サンキュー」「あいあいデイサービス」の協力のもと、充実した体験活動を積み重ねることができた。また、交流及び共同学習では宇都宮白楊高校や宇都宮北高と交流し、HPや連絡帳を通して、家庭や地域に活動の様子を発信することができた。地域とのつながりを大切にしながら、情報発信をしていく。
		特別活動部	・地域の人たちの本校への理解促進に向けて、学校祭や各行事の情報発信を積極的に行う。	4	・大きな行事については、HPの活用や広報誌を発行することで活動の様子を発信することができた。また、地域の行事である「豊郷まつり」に参加し、児童生徒の作品を通して地域の方と触れ合い、本校を知ってもらう機会となった。交通安全街頭活動では、児童生徒会役員が警察署と連携し地域の交通安全の啓発に取り組んだ。 ・次年度は、HPでの発信を継続し、大きな行事だけでなく、各行事や出来事について発信を行う。
		進路指導部	・関係機関と連携し情報収集、情報発信に努める。校内では進路指導部からの発信だけでなく、担任に情報を周知することで児童生徒への指導に役立てることや個々の家庭のニーズに合った情報提供をできるような体制作りを行う。	4	・宇都宮市の福祉サービスについての出前講座を取り入れた。家庭や教職員に向けて校施設等から収集した新規情報の掲示やパンフレットの提供を継続して行った。校内では学部ごとの進路研修を開催することで、生活年齢に合った進路情報を教職員に伝えることができた。関係機関との情報交換等では、本校の医療的ケア児が増加している状況を伝えている。 ・保護者への情報提供や進路行事への参加率アップを推進するため渉外部と連携する。
		地域支援部	・センターの機能充実事業の取り組みについて理解を促すべく、おーぶんすくーや教育相談、夏季研修会等の支援を充実させ、HPを通して地域に情報を発信していく。	4	・夏季研修会では、「言葉の育ちと発達段階における関り」と題し、4年ぶりに対面で実施した。外部から45名の参加者があった。アンケートからは概ね、貴重な学びの機会となった等の高い評価が得られ、実施後の報告をHPで発信した。今後も地域のニーズを把握しながら、センター的機能の役割を担うよう努めていく。
		渉外部	・アンケートの工夫等をして、保護者の要望に沿った研修や講習会を企画できるようにしていく。 ・のざわ祭等の行事の際に、同窓会と保護者の交流や情報交換ができる機会を設ける。	4	・PTA講習では保護者交流を重視したソフトバレー、研修では卒業後の進路の多様化を踏まえA型・B型・生活介護の施設見学を行った。 ・のざわ祭では同窓会による飲料等販売を行うとともに、活動紹介を行った。 ・保護者研修について進路指導部との連携を検討する。
		寮務部	・保護者や地域の方に対して、寄宿舎の取り組みや活動についての情報をホームページや寄宿舎だより、クリスマスコンサートなどで寄宿舎の魅力を大きく発信し普及を図る。	5	・寮祭、クリスマスコンサートや避難訓練では、積極的に地域の方々や保護者に参加を募った結果、入舎していない保護者や地域の方の参加が増えて、のざわ寄宿舎の理解が深まった。 ・引き続き、地道に心をこめて感謝の気持ちを持ってとりくんでいく。